

《資料》

私の父——金細工師マシネの一生——

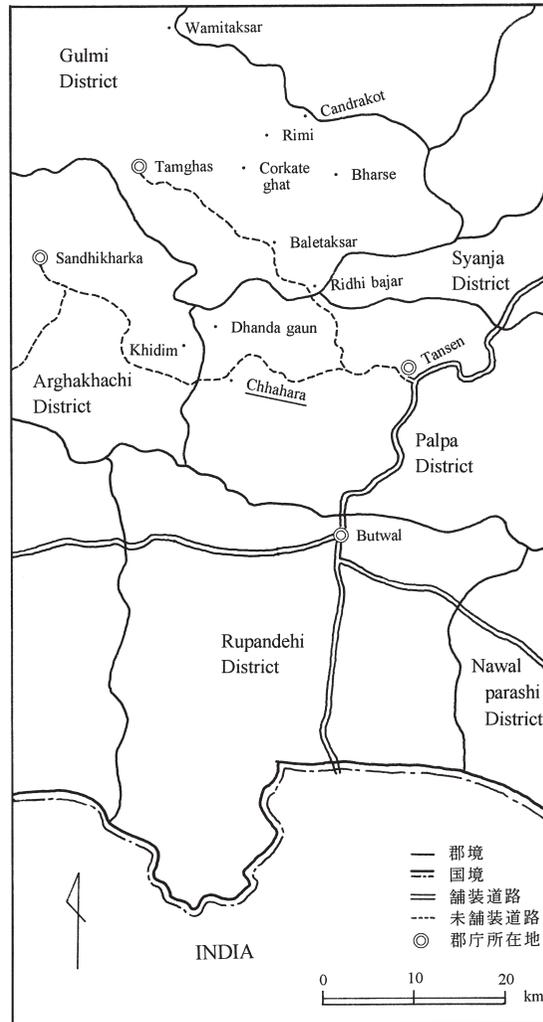
ロク・バハドゥール・バラール

誕生と子供時代（8歳まで）

ネパールの首都カトマンズの西方約350kmにあるアムラバスという名の村は、パルパ郡のチャハラ村落開発委員会という行政村の第5区に位置する。そこからはダウラギリやアンナブルナやマチャブチャレ等の峰々が望まれる。この村に1組の夫婦が住んでいた。夫は人々から「ヒレ：Hire」と呼ばれており、(今日でも「ヒラ：Hira」はダイヤモンドを意味するが、その派生語ヒレは上位カーストが下位カーストの男性を呼ぶ古い呼称である)そして妻はダンガルニと呼ばれていた。(これはチャハラ村でつけられた呼称で、彼女の生まれ故郷の地名「ダンダ」にちなんだものだったが、その地では彼女は両親から「小さな愛らしい少女」を意味する「サニ」という名前と呼ばれていた。)この夫婦は1人の男の子をもうけた。その子は司祭によって「インドラ・バハドゥール・スナル」と命名された。だがこの子は生まれつき痩せていた上に、父親の死後は栄養不足だったため、近所に住むダンガルニという名(マガールのダンガル氏族の女性)の父方のオバは、この子を「マシネ」(「痩せっぽちの子供」の意)と呼んだ。その呼び名は公にも通用した。彼は両親にとって初めての子供だった。誕生の正確な年月日は、公式書類が存在しないためはっきりしないが、1927年の3月(Phagun 1983 B.S.)だった。

父親は主に農業や金細工、家畜飼育等を生業としていた。当時近くに隣家がほとんど無かったので、この子には一緒に遊ぶ友達がいなかった。隣人といえばマガールという民族がいただけだった。母親は夫の農業を手伝い、家事をよくこなしていた。大変賢い女性で、上手に家計を維持する良い妻だったが、彼女は実は夫の7番目の妻だった。夫は乱暴で怒りっぽく粗野な男だったので、6人の先妻たちは皆、彼から逃げてしまっていた。しかし彼女は非常に辛抱強く寛容で誠実な人柄だったから、夫が幾多のもめ事を引き起こしたにもかかわらず、世間の評判は良かった。

さてマシネはこの2人の長男だったが、栄養豊富な牛乳をたっぷり飲むという幸運に恵まれたので(牛や水牛の乳は今日でもネパールの子供達にとって母乳に代わる栄養源である)、痩せてはいたが丈夫な子供だった。父親はいつも牛乳を煮詰めてから息子に飲ませていた。丸々と太った健康な子供にしたかったのだ。だが息子の体はどうしても彼の望みどおりにはならな



パルパ郡周辺概念図

かった。そこでこの子は、ダンガルニという名の近所のマガル人の女性から「マシネ」(mashine: 痩せっぼち)と呼ばれるようになったというわけだ。マシネという名は、後に彼の本名であるインドラ・バハドゥールより通用するようになり、晩年にはマシネ・スナール(スナールは金細工カースト名)という名が公共の場で告知されると、奇妙なために人々の笑いを誘った。また父親は読み書きができたので、息子に初歩的な綴りを教えようとしたが、中途半端に終わってしまった。マシネはよく言ったものだった。「小さい頃に父が死んでしまったから、勉強する機会が全然無かったんだよ」。後年のマシネは、金属職人として必要なあらゆる技術に習熟する程の高い知的能力を示した。しかし父親に綴りを習った時には、うまくできないと父親は息子をドアの外に連れ出して、こう言ったものだった。「ほら、美味しいミルクだよ。読み書きがちゃんと覚えられたら、おまえにあげような。」こうして栄養豊富な牛乳を飲

んでいたためか、マシネは痩せっぽちではあったが、大変丈夫で賢い少年に育った。

父親はよく金細工師をするためにタライ(マデシともいう)へ出稼ぎにいったので、母親の方は家事や農作業のかたわら、息子の世話をしていた。そのためにマシネは、父親の生存中に彼からかわいがってもらったり、いろいろな事を教わる機会がほとんどなかった。また父親は出先で仕事をする金細工師だったから、父親から金細工の技術を学ぶ機会はなかった。あったとしてもマシネはまだ幼なすぎた。こうして彼は遊んだり母親の家事を手伝ったりして、日々を過ごしていたのだった。

1930年頃の事、母親は陣痛のために17日間苦しんだ。その時父親は金細工の仕事でタライに出かけていて留守だった。世話をしてくれる者もないまま悶え苦しんだ末に、彼女はやっと女兒を産んだが、その赤ん坊は既に死んでいた。そんな辛苦にあっても、彼女にはゆっくり休む余裕はなかった。なんとか食料を調達して栄養を補い、10代の出産(彼女は19歳だった)で消耗した体力を回復した。こうして彼女は死の淵から逃れ、来るべき様々な困難に立ち向かう忍耐力を再び取り戻したのだった。一方父親は、雨期が始まる前にいつものように、雨期に備えるための米や塩、布、石油等を持って家に帰ってきた。彼は例年収穫が終わった後の11月頃に出掛け、農作業が始まる直前の3月頃には戻ってきていた。

1934年の11月には、母親が2人めの男児を出産した。妻の世話をした後で、父親はいつものように仕事でタライに出かけていった。しかしこの年、すっかり憔悴した父親は、いつものように様々な品物を持ってくるかわりに、病におかされた体をかかえて家族の元へ帰ってきた。仕事がかまくいかなかったので、家へたどりついた時ポケットの中は空っぽだった。様々な品物の代わりに彼が家族の元に運んできたのは、マラリヤにおかされた彼の体1つだった。彼はそれまでの生涯で水牛の肉を口にすることは一度も無かった(この肉を食物だとみなさなかった)が、この時は革細工カースト(現在でも死んだ動物の肉を食べる)が死んだ水牛を解体している場所まで自ら出向き、肉を切り分けて貰うまでそこで待っていた。しかしとうとう彼は53歳で死んでしまった。この時彼の妻は22歳、長男のマシネは8歳、そして次男のスリーマンは2ヵ月になったばかりだった。父親の死後、マシネはもはや子供でいることはできなくなった。大人と同じように働かなくてはならなかったからだ。

金細工の技術を習得する

マシネが金細工の技術を修業したのは8歳から15歳までの期間だった。この年頃の子供にとって、技術の習得は楽しい挑戦のように感じられたが、困難もまた多かった。この頃の経験についてマシネはこう語っている。「収入を得るために、ハンセン病患者の足のマッサージさえやらなければならなかったこともあった。」そのため彼は、他人からの憎悪に満ちた仕打ちや抑圧に対して、忍耐強くなるすべを学ぼうと努めた。彼が人生で成功をおさめ、またその人生が子孫達にとっても有意義なものとなるために、この時期は大変重要だった。彼が身につけた技術の素晴らしさは、自らの努力無しに人生で成功する者は誰もいないということを、我々

に明示している。

マシネは金細工職人の技術やその他諸々の事を学ぶために、パルパ(ジョエパニ)の親類の家に移り住んだ。師匠は穏やかな人物で、彼の父方のオバの夫だった。優しく親切な師匠は、マシネの生家の近くの親類を訪ねる時には、マシネの母親の願いに快く応じ、マシネと一緒に連れて行った。この時マシネは、プサイン(父方のオバの夫)にあたる師匠と共に出かける時に着るダウラ(ネパール式のシャツでボタンの代わりに紐で前を結ぶ)すら1着も無かった。そこで母親は近くのコルボット村のブラーマンの1人から、マシネのために古着のダウラを譲ってもらってきた。

師匠は金細工職人の仕事の他に農業もやっていたので、マシネは金細工の仕事の他に、師匠の家の農作業や家事も手伝わなければならなかった。だが彼は影日向無く、骨惜しみせず、誠実に働いたので、師匠の家の人々だけでなく、周囲の村人達からも好かれていた。オバのプバイは家畜のための牧草刈り、薪集め、水運び、放牧、家畜小屋の掃除といった仕事もマシネにやらせた。師匠も金細工の仕事の他に、あらゆる農作業(犁耕、播種、雑草取り、収穫等)や、自分の足のマッサージまでマシネに好んでやらせていたので、遊ぶ時間はおろか十分休息する暇さえ無かった。同年代の遊び友達もできたのだが、いつも仕事に追われてばかりだった。遊びたい盛りの年頃なのに、厳しい労働だけが友だった。子供の人権などは、他の子供たちも同様だったが、問題にもされていなかった。マシネのような貧困家庭出身の子供にとって、重労働をこなし、その報酬としてなるべく多くの米の食事にありつく事が、ある意味での人権なのだ。もし師匠のところに行かなかったら、母親の暖かい愛情には包まれていても、ずっと空腹を抱えたままにいる他なかっただろう。金細工職人になる修業の間には、時には御馳走を食べる機会もあったが、ごくつましい食事だけの日もあり、とても勇気づけられたかと思えば、さんざんに侮辱され無視され、また逆に褒められたりと、様々な経験をした。だがマシネは他人の冷たい仕打ちにもけっして挫けること無く、明るく前向きに生きる姿勢を常に失わなかった。

プサインにあたる師匠は、時々金細工の仕事をしに近郊のグルミ郡へ出かけたが、そんな時にはマシネが仕事道具や必要品を詰めた鞆を持ち、師匠の供をした。彼らが訪問していった主な村はバルセ(Bharse)、チャンドラコット(Chandrakot)、ワミタクサル(Wamitaksar)、バレタクサル(Baletaksar)、リイミイ(Rimi)、チョルカテ(Corkate)等だった。師匠が仕事をしている間、マシネは助手を務めて、金細工の技術を学ぶことができた。また師匠は材料の金や宝石等、仕事に必要なものすべてを、タンセン(パルパ郡の郡庁所在地)から仕入れていたが、やがて誠実さを見込んでマシネにこの仕事を任すようになった。仕入れの旅の途中、ワミタクサルとタンセンの間では、往復ともリディ・バザール(Ridi Bazar)に宿泊した。

ある夜マシネはバッテリー(宿屋も兼ねた小さな食堂)で、ラフレたち(インドの軍隊等に傭兵としてでかける人々はラフレと呼ばれる)から踊ってくれと頼まれ、そのこづかいとして20パイサをもらった。翌日、彼は同じ道を行くラフレたちの荷物を運んでやり、またささやかな報

酬を得た。こうしてマシネは仕入れの度にいくらかの金を稼ぐようになり、それを貯めて母親に渡した。ラフレたちは手伝いの礼として昼食を食べさせてくれたり、食料をくれたりした。

ある時グルミへの旅の途中で、1人のラフレの後を歩いていると、その男の包みの中にセル・ロティ(ドーナツの形をした揚げパン)があるのが目に入った。空腹だったマシネは、すぐにも手に入れて食べたかったが、いったいどうやったらそれをラフレに伝えられるだろうか? 彼はなすすべも無く、その男の後をただついていった。すると男は振り返ってマシネを認め、「おい、坊主、この荷物を持ってくれないか?」と言ったのだった。マシネは喜んで「いいよ」と答えた。そうすればきっとセル・ロティにありつける機会があるにちがいない。どうしてもセル・ロティが食べたい。だがそれをもらえる機会は、ラフレが疲れて空腹になり、一休みする時以外に無い。とうとう男はチョーパリ(木陰に作られた休憩所)に腰を下ろして言った。「ほら坊主、これを食べろよ。」そしてセル・ロティをくれたのだった。ようやく目的地に到着した時に、男はマシネに25パイサをくれた。マシネは嬉しくなり、男に心から感謝した。このようにしてマシネは師匠がくれた旅行中の食事代も浮かすことができたのだ。この経験によって、マシネは物乞いでなく、自らの労働を頼みとすることを肝に銘じた。苦しい労働によって人々を幸福にして、その報酬を得ること、すなわち骨惜しみしない労働と正直さは、マシネがそれからの人生を生き抜いていく支えとなった。

やがて師匠は仕事から引退し、マシネは師匠の息子と共に仕事をするようになった。この息子は22歳程で、マシネは13歳位だったから、彼をサノダイ(小さい兄さん)と呼んでいた。サノダイは大変利口で話が巧みな男だった。どんなに財布の紐が固く、彼に装飾品を注文するつもりなど全くない人であっても、冗談で巧く言いくるめて気を変えさせ、最後には、彼に装飾品を注文するのが嬉しいという気持ちにさせてしまった。こうしてマシネは彼から、お客の心をつかんで飲ばせる巧みなやり方を、いろいろと学ぶことができた。

若いサノダイは、既に妻がいるにもかかわらず、出張先から帰宅する旅の途中で、タカリニー(タカリー人の女性)がいるバツティに一泊し、彼女たちに自分で作った装飾品を贈って気を引き、仲良くなった女性と一夜を共にすることもあった。またサノダイの住む金細工カーストの村は二つのグループに分かれており、軽い口論が殴りあいの喧嘩にまで発展することが度々あった。サノダイの右手の親指は、そんな激しい喧嘩の最中に、相手に噛みちぎられてしまった。彼は小柄だったので、周囲の人々からはクチュレ(kuchure: ちび)とあだ名されていた。そんなサノダイにマシネは忠誠を尽くし、ふたりは仲良く力を合わせて仕事をうまくやっていた。だがある日のこと、マシネはサノダイの妻から、仕事に出たらついでに彼女のサリーを受け取ってきて欲しいと頼まれた。(本来マシネは彼女からもっと敬意を払ってもらってもいいはずだった。というのはネパール社会では、男性は女性から敬意を払われるべきとされ、けっしてサリーや靴といった女性のものを運ぶように求められることはないからである。)この時マシネは、サノダイの妻が貧しいマシネを見下しているから、こんなひどい屈辱的な扱いを受けるのだと感じたのだった。

やがてマシネは14歳となり、金細工職人としての基本的技術は全て習得し終えた。このために彼が学ばなければならなかったことは、以下のような、主要でかつ金細工職人にとっては一般的な知識の数々であった。

- ・炭火の使い方：彼はまず金や銀等の金属を溶かしたり、切り落とした金属片を熱で柔らかくするため、ファイゴで炭火をおこすことを手伝わされた。
- ・装飾品のつや出し：光沢剤の酸、塩酸、硝酸、ホウ酸等の化学薬品の使い方を教わった。
- ・鋸打ち：地金を平らに打ち延ばして薄い金属板にしたり、鋸で叩いて針金を作ること、その針金を多数の穴のあいた工具に入れて引き抜き、更に細い針金に加工する技術を学んだ。
- ・溶接：金属溶接の際に用いる硼砂の使用法、二つ乃至はそれ以上の金属を溶接するのに適当な炎の温度等を教わった。
- ・様々な道具の使用法：小さなヤスリ、ノミ、ハサミ、キリ、タガネ、ヤットコ等の道具の使い方を学んだ。
- ・技術習得の方法：様々な技術を学ぶにあたって、弟子は師匠からまず指針を与えられ、その指示に従って技術を習い覚えていく。しかし、より進んだ専門技術の知識を身につけるために最も重要なことは、師匠が実際に装飾品を作っている方法を、よく観察することである。今までに無いような独創的な、またより良い品質の装飾品を作るためには、職人は自分自身の技術を最大限に用いるよう努めるだけでなく、他の職人の作品を見てそれを模倣することも必要である。

マシネは見習い期間を通じてずっと、仕事を掃除して集めたごみの中から、非常に細かい金のかげらを拾い集めていた。こうして貯めた金をどうやって師匠や他の人々から隠しておくかが、彼にとっては大問題だった。はじめ彼は壁の小さな穴の中に隠し、目印になるよう木のかげらで穴に蓋をしておいた。だが師匠は抜け目なく見破り、穴の中身は持っていかれてしまった。そこでマシネは金の屑を、自分のダウラの袖の中に隠すようにした。こうしてなんとか金を貯めることができるようになった。貯まった金を母親に渡すと、母親は大喜びして、余りの嬉しさに泣きだした。彼女はその金の屑を金銭に換えて、ダサイン祭りのための新しい服や御馳走を買い整えた。

マシネはいつも落ち着いた立ち居振る舞いをしており、師匠は彼に対して揺るがぬ信頼を寄せていた。キリヤ(ヒンドゥー教で肉親の死に際して行なわれる13日間の服喪期間。期間中遺族は塩を断つ。)を過ごしていたある時のこと、師匠は他の人々がいる前で、マシネに砂糖を持ってくるよう命じた。しかしマシネには、師匠が実は塩を欲しがっているのがすぐにわかった。そこで塩を挽いて細かくして師匠のところへ持っていった。こうして師匠は皆に気づかれず、塩味の効いた御飯を味わうことができたのだ。この話はマシネと師匠との間の、信頼の絆の強さを示す一例である。15歳頃にはマシネはすっかり成熟し、一人前の大人としての仕事ができる。そこでサノダイがワミタクサル(タクサルとは政府発行の硬貨を作る造幣

所)に金細工の仕事で出張した時には、マシネも助手として同行し、いくらかの収入を得ることができた。こうして彼は以前にも増して、母親を経済的に援助できるようになった。

15歳のマシネは、古くからの顧客の注文に応じ、様々な装飾品を作るまでに成長していた。独立して金細工の仕事をしていくことに、十分な自信を持っていた。師匠もおそらく同様に、マシネが彼自身の名前で仕事を始め品物を作るのを望んでいるだろうと思われた。だがこの事については、師匠も弟子も、なかなか話を切り出せなかった。7年もの間暮らしていた師匠の家を出ていくには、大変な決心が必要だったのだ。どのような弟子にとっても、師匠の家はどこよりも重要な意味を持つ場所であり、心情的に強い結びつきを感じているものだ。マシネは何度も決心したが、なかなか口に出せなかった。師匠にとっても、それは同様に難しかった。マシネは彼にとって、自分の息子同然に扱い、愛してきた、唯一の弟子だったからだ。ある日とうとうマシネは師匠の前で話を切り出した。「おじさん(プサイン)、今まで本当に有難うございました。母と弟が待っていますので、どうぞ家へ帰ることをお許し下さい。」そして師匠の足元に膝まづいて暇乞いをして、師匠からの祝福を受け、遂にマシネは徒弟時代を過ごした師匠の家を後にしたのだった。

結婚と家庭生活

師匠の家から実家へと戻った時、マシネは新しく金細工の仕事始めるための元手を、何一つ持っていなかった。母親もまた、農業や荷役や地酒づくり、養鶏等で僅かな収入を得てはいたが、全て日々の生活で消えていたので、息子の開業を援助してやれなかった。マシネはまだ若すぎる上に、信頼されるような仕事上の知り合いもいなかったから、親類や知人から元手を借りることもできそうになかった。彼は周囲の人々から「52回足蹴にされ、53回殴られるような目にあう」(とても辛い生活を表すことわざ)という言葉どおりに扱われた。この時は誰もかも、マシネに硬貨1枚投資しようとはしなかった。元手となる資金が無いだけでなく、マシネには信用も、顧客も、客を紹介してくれる人もおらず、金細工師としての新規開業は困難を極めた。仕事に必要な道具さえ、十分に揃っていないのだ。しかし彼は装飾品製作に必要な鉄製の工具を、自らの工夫によって作り出すことによって、困難を乗り越えた。

こうしてマシネは鉄鍛冶の知識と技術をも身につけた。彼は苦況を受け入れ、これに挑戦し、克服することを誓った。まずは真鍮製や銀製の指輪・耳飾り等の装飾品を作ることから仕事を始めなくてはならなかった。マシネが装飾品を製作できると知った村人たちは、古い装身具を流行する形のフリー・ブラーキ(鼻に飾る装飾品)や耳飾りといった新しい装身具に作り直す仕事を注文してきた。彼の技術と仕事振りは村人たちの信用を得て、やがて新品の装身具を作る注文が来るようになった。だが彼には地金用の金の仕入れに必要な現金が無かった。そこで注文主に代金を前払いしてくれるよう頼み、それを持ってタンセンへ行行って金を仕入れ、注文品を作った。

開業当初は十分な量の注文が来なかったので、マシネは時々近隣へ賃金労働にでかけた。雇

われ先での雑多な種類の労働から、彼は大工仕事や農業といった、他人に頼らず暮らしていくために必要な、多様な技術を学んでいった。このような様々な畑違いの技術を学んだきっかけは貧しさだったが、独立して誰にも頼らずやっていきたいと望んでいたからでもあった。そういうわけで、マシネは農民や金細工職人として成功するのに必要な、非常に多くの技術と知識を身につけていったのだ。彼は労働ということに大きな信頼をおいていた。およそ50年の間、彼の勤勉さ、誠実さ、高い技術といった名声は、隣人や近隣の村々を越えて、はるか遠くまで鳴り響いていった。

開業当時の生活は大変ではあったが、それ以前に比べればましだった。彼は小さいながらも新しい家を自分で建てた。こうした彼の労働をじっと観察している者がいた。やがてこの男はマシネの仕事振りに関心して、自分の3番目の妹のシラと彼を結婚させようと決心し、その話をもちかけてきた。マシネは突然の事に驚き、大変な幸福感と同時に僅かな不安も感じた。自分の家族を養うための生活基盤さえまだできていないことは不安だったが、自分より経済的に高い地位にある人が自分を認め、妹との結婚を申し込んでくれたことは嬉しかった。その時彼は幸福感よりもなお強く、将来への意欲を感じた。それまでもけっして人生の困難から逃げたことはなく、常に立ち向かってきたのだから。マシネに妹との結婚を申し込んできたのは、アルガカーチー(パルパ郡に隣接する郡)のキディム村(Khidim)の、ウダヤ・バハドゥール・スナールという人物だった。

さて今やマシネは結婚の準備をしなければならなかった。実際問題として豪華な結婚式をあげることはとてもできなかったが、できる範囲で、彼が維持していきべき社会的地位に相応しい婚礼を整える必要があった。社会的慣習によれば、まず彼には正式な婚約のために父系のオジが1人必要になる。(新郎の父が既に他界している場合には、父親の兄弟もしくは父系の親族が、新婦の後見人に対して、正式に結婚の申し込みをしなければならない。)正式な婚約は、そのオジを含む一行によって、ヨーグルト、バナナ、酒、セル・ロティ等から成る贈り物、サグン(Sagun)を持っていくことで結ばれる。一方結婚式では、現在でも人々は借金をしてまで、様々な種類の太鼓の演奏、銃の祝砲、新郎を運ぶ馬か輿、花嫁への高価な贈り物として3組や5組、時には7組もの衣類や装身具、上等な食事等を用意して盛大な式を挙げようとする。新婦の後見人は、今日でも豪華な御馳走、高価な装身具等の贈り物を要求することがある。新婦側から要求するもの(ダル: Dar)には3、5、7という数が好んで用いられる。例えば5という数を使った贈り物の組合せは次のようになる。

- 1) 5組の衣装
- 2) 500個のセル・ロティ
- 3) 5ダルニ(dharni: 1ダルニ ≒ 2.5キログラム)の肉
- 4) 5パティ(pathi: 1パティ ≒ 5.6リットル)の酒
- 5) 5トラ(tola: 1オンス ≒ 2.66トラ)の黄金

ウダヤ・バハドゥールは、実はマシネと同じように、若くして(13歳)父親を失っていた。彼

は8人の兄弟姉妹と母親の面倒をみなければならなかった。多くの困難を経験してきたので、マシネの家庭の事情をよく理解していた。そのため彼はマシネに結納の品を何ひとつ求めなかった。こうしてマシネは無理をせずに、自分の経済力に合わせて、8人から成る結婚の行列に必要なものを準備した。新婦への贈り物は、いささか簡単だが、2組の衣装、1組のマドリとドゥングリ(耳飾りの一種)、ポテ(ビーズの首飾り)、チュラ(腕輪)、ティカ(朱の粉)、ドリ(後髪にあみこむ紐)、指輪等だった。またサゲンとしてロティ、ヨーグルト、バナナ、マティヤ(約6ℓ入る容器)に一杯の地酒、一抱えのサーグ(約1kgの野菜)を用意した。婚礼の儀式はすべて質素に行なわれた。ウダヤもマシネにタウロという銅製の容器とガーグリという銅製の水入れ等の、簡素な持参財(ダイジョ: Daijo)を贈った。新婦の髪分け目に新郎の手でシンドゥール(既婚の女性がつける朱色の粉)がつけられ、ヒンドゥー教の婚礼の儀式を終えると、列席者の前で、ウダヤの妹がマシネに与えられた事が正式に告知された。婚礼の一行が新婦の家から新郎の家へと出発する際に、新婦は新郎から贈られた衣装と装飾品を身につけることになっている。だが新婦はマシネの贈り物を身につけなかった。これを見てマシネは「彼女は自分のような貧しい者からの贈り物は、身につけてもくれないのか。」と嘆いた。新婦はマシネの母親から額にティカをつけられ、祝福されて、その日から我が家となる家に入った。

それでも妻のシラは、誠実で働き者で美しい女性であることがわかり、マシネは幸福だった。マシネの語るによれば、新婚夫婦への母親の暖かい祝福に包まれて、シラとの結婚後、生活は次第に良くなっていった。夫婦はほぼ同じ年齢で、6人の子供に恵まれたが、その内の1人は死産であった。最初の子供は1950年に生まれ、その後それぞれ約3年の間をおいて、5人の子供が次々に生まれた。3人目だけが娘で、他はすべて息子だった。その娘は生まれてすぐに、ヒラ・ガハトハラジ(マシネの師匠の近縁)という男の子の許婚者となった。

マシネは長男には初等教育だけを受けさせるために学校へ行かせた。将来仕事をしていくには、その程度の教育で十分だと判断したからだ。初等教育を終えると、長男は父親の金細工と農作業を手伝った。その後長男は、次男に9クラスまでの教育を受けるよう勧めて、4年間の専門技術教育をプトワールで受けさせた。三男(筆者ロク・バラール)は2人の兄の勧めに従い、2人からの経済的援助を受けて大学に進学し、その後物理学の修士号を得て大学の教員となった。末の弟は10クラスに進むことができなかったが、家族全員が彼を慰め勇気づけた。マシネの唯一の娘は学校に行かなかった。当時(今から40年程前)は、学校へ行く女性など、誰ひとりいなかったからだ。マシネの次男は1994年に死亡した。

マシネは自分の子供たちに遊ぶ暇を与えず、様々な仕事の手伝いをさせた。子供たちが遊べるのは、父親が家を空けた時だけだった。彼は子供たちに働くことだけを望んだ。子供たちに冗談を言ったことは一度も無く、歩いて行くとき子供を抱き上げたり、子供と手をつなぐこともけっして無かった。精力的で活動的な生活をおくるよう、常に自らを戒めていた。そして45歳の時、18歳になった次男と競走したが、もはや息子に勝つことはできなかった。それでも「もし身体の右側が麻痺したとしても、自分に残された左側だけで仕事をし続けるだろう。」と

語っていた。その頃には三男を除いて、他の息子たちと娘は全員結婚しており、合計 10 人の孫がいた。長年連れ添った妻を大変愛していて、彼女をナニー・キ・アマー(娘のお母さん)と呼んでいた。また母親を大層敬っていた。妻と母親は時々諍いをしたが、その度にたとえ妻の言い分の方がもっともだと思っていなくても、母親を悪く言うことなく、妻の怒りを甘受した。このような夫の態度に傷ついて、妻は夫と一緒にトウモロコシ畑で働きながら、よく泣いたものだった。そういう時には、彼は深い愛情と同情を示して彼女を慰めた。こうして母親への敬慕と妻への愛情との間に均衡を保っていたのだった。

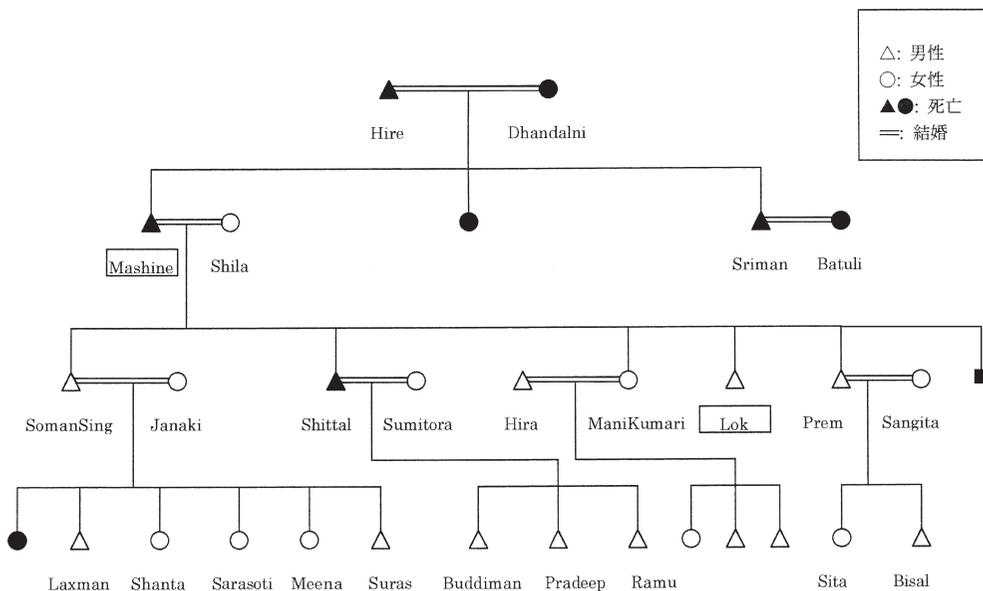
弟スリーマンのこと

ところで、マシネの父親が死んだ時、弟のスリーマンはまだ生後 8 ヶ月だった。そしてマシネが師匠の家に行っていた間、母親は 1 人で弟の面倒をみていた。当時母親は賃金労働や荷役、酒造り等の仕事をして弟を養っていた。荷役では、時々 2 週間程家を空けなければならないこともあった。わずかな食物が底をつくとき、母親とスリーマンは茹でた豆だけ、時々は塩味無しの茹でたサトイモの茎 (Graba) だけ(家には塩すらなかった)の食事をとっていた。時には隣人からもらったトウモロコシを挽いて、それでスープを作ることもあった。こうした貧しい暮らしであっても、母親の暖かい愛情を受けて、スリーマンは元気に成長していった。

マシネが師匠の家から戻った時、弟は 8 歳になっていた。その後スリーマンはマシネから金細工の技術を教えてもらった。物覚えが早く、兄から様々な技術を次々に習得していくようになった。マシネは技術を教えている時に弟が何か間違いをすると、手を休めて先を尖らせた火バサミで弟の足をつついた。こうして兄のもとで厳しい訓練を受け、スリーマンは兄をしのぐ程の様々な技術を習得していった。金細工で装飾品を作ることから、木製品や竹製品を作ったり、縄をなったり、農作業や修理作業に至るまで、新しいやり方を考案したり既にある技術を模倣したりする事では、スリーマンはその巧みさで兄のマシネを一步上回っていた。

こうしてスリーマンは兄を越える名職人になるはずだったが、現実には逆の方向に向かった。実はスリーマンは素行が良くなかった。若い頃の彼はハンサムで、素晴らしい装飾品を作るだけでなく、歌も踊りも楽器の演奏もうまかったので、多くの女性たちが周囲に集まり、仕事よりも恋愛に多くの時間を費やすようになった。そのうえ大酒を飲んで煙草を吸うようになり、賭け事にも夢中になったので、後に彼は貧しく病気がちな人生を送るようになるのだった。マシネは弟が 20 歳になった頃、小柄でかわいらしいがあまり美人とはいえない娘と結婚させた。スリーマンが他の女性たちとの恋愛を繰り返していた原因の 1 つは、この結婚だったのかも知れない。弟の結婚後、弟の妻は家族によくつくしてくれたが、この 2 組の夫婦はあまりうまくいかなかった。

マシネは 32 歳になった時、ついに弟夫婦との共同生活を断念することにした。母親は長男のマシネとその誠実な妻と共に暮らす方を選んだ。その後スリーマンの経済状態は次第に悪化していき、兄の築いた財産をうらやむようになった。酒に酔ってマシネと口論したり、自分の



マシネの家系図 (family chart)

妻や子に暴力を振るうことも多くなった。弟が口論を仕掛けてきても、マシネは殴り合いになるのを避けるために、いつも沈黙を守った。彼は弟が様々なもめ事を起こしても、けっして彼をとがめるような態度をとらなかった。2つの家や広い土地など、この一族の財産のほとんどはマシネが1人で築いたものだったが、社会的には兄弟共通の財産とみなされていたので、兄弟の間で均等に分けなければならなかった。後にマシネは弟の家の隣にあった自分の大きな家を取り壊し、自分たちのために新しい別の家を建てた。マリーマン(享年65歳)は1998年3月に死亡した。

様々な技術の習得とその応用

8歳から15歳までの修業時代に、マシネは師匠の家で様々な技術の基礎を学び、修練をつんだ。しかし当時の彼は思うにまかせない状況にあったので、それらの技術を応用して使ってみることは難しく、実行は将来に延ばさなくてはならなかった。そこで彼は周囲の人々や経験をつんだ人々のやり方をよく観察して学び、自分の経験も生かすようにした。彼は将来の成功のために、以下のような技術や方法を学んだ。

1. 農業

マシネは農業の他、金細工、鉄鍛冶、家畜飼育、賃金労働など、様々な仕事の技術を次々に習得しなくてはならなかったが、彼が生きていく上で最も重要かつ基本的な仕事は農業だった。農業をうまくやり遂げられないかぎり、自分の将来に希望は無いことを、マシネはよく知って

いた。そのため他の人々のやり方を観察し、彼らに質問することで、農作業の知識を増やしていった。

最も重要だったのは、様々な型の農機具について知ることだった。マシネは試行を重ねながら、それらの農具を自分で作ってみた。様々な実験を繰り返し、遂に彼は十分な収穫をあげるのに役立つ農具を作ることができるようになった。例えば、犁の高さは耕作に使う牛の背の高さに応じて変えなければならないというように。マシネは犁や、クワ、カマ、オノ以外の簡単な鉄製農具、コック(水田の土をならす馬鍬)やピャウリ(水田の表面をならすための平らなシャベル)、竹カゴ、ナムロ(背負い紐)といった道具を自分で作った。また他方で、オノ、カマ、ファリ(犁に取り付ける鉄製の刃)といった大きな鉄製農具も自分で修理した。近くには様々な鉄製農具を取り揃えている店がなかったし、またマシネにとってこうした農具を自分で作るのは難しいことではなかった。

マシネの母親は、様々な農作業や収穫の時節をよく心得ていたので、息子にいろいろと助言を与えた。また母親は、自ら犁入れをしたり、屋根を葺くことができなかった(このような社会習慣は今日でもまだ残っており、女性が家の屋根を葺いたり、田畑を犁耕することは禁じられている)ので、息子の帰還が嬉しかった。マシネは自分たちの畑に垣根(境界線)をめぐらし、広い荒地を開墾して水田を作って耕し、田畑から雑草を抜いた。始めの内は慣れていないので、仕事は容易ではなかった。母親に教えてもらい、母親の知らない事は他の人々の助けを借り、農作業に必要な知識を習得していった。

彼はこう語っていた。「外の世界から戻って来る時、何も新しいことを持ち帰ってこないようでは、1人前の男とはいえない。」大変熱心に農作業に打ち込み、播種期に最高の肥料となるキルラ(kirra) [キョウチクトウ科の *Wrightia antidysenterica*] の葉や薪、材木、子供たちへの果物、家族のための穀物といったものを、いつもかかえて来た。耕作中に犁が少しでも石に当たると、その度に牛を止めて、石を掘り出すか割るかして、その石を取り除くまで働き続けた。マシネは畑を耕し、掘り返し、垣根(家畜が畑に入るのを防ぐ目的で、石を積んだり植物を植えたりトッシュくTosh)とよばれる高い斜面を作る)をめぐらし、新しい水田を拓き、種を播き、牛に犁を引かせて水田を耕し、雑草を取り、収穫し、なるべく良質の種を用意し、最高の肥料を作り、他人に手伝ってもらって雄牛を去勢し、若い牛を犁耕に使うために訓練し、木で犁を作り、こうして次第に高い農業技術を習得していった。彼が栽培していたのはトウモロコシ、米、小麦、カラシナ、大豆(非常に良質である)、ジャガイモ、様々な豆類、いろいろな野菜、カボチャ、キュウリ、サトイモ、ソバ等であった。

マシネは様々な体験をしてきた。関節炎を患うまで、少しも休むことなく働き続けた。他人に頼らず自立して生活したいと望み、そして人生で成功をおさめた。晩年の数年間を除いて、いつも大変熱心に働いた。多方面にわたる様々な経験を持っていたので、彼のもとには村人たちが助言を求めてやって来た。そういう時は惜しみなく時間を割き、彼らの助けになろうと努めた。家族からは時々、度が過ぎると非難されることもあった。彼には余暇を楽しむ習慣がな

く、何もすることがないと、仕事がしたくて手がうずくのだった。50歳までは金細工や農業等、雑多な仕事に従事してきたが、50歳を過ぎてからは主に農業をして日々を送っていた。その頃には長男が金細工の仕事を上手にこなしていたからである。視力が衰えたため、金細工のような根気のいる細かい仕事が難しくなり、むしろ肉体を激しく使う労働を好んだ。田畑の犁耕は辛い仕事ではなかったが、広いので1人では手に余り、ジョットバーレ(Jotbhareとは、地主から借りた金の利子分を労働で支払う人をさす)を雇っていた。マシンはいつもあらゆる仕事を大変丁寧にいき、いい加減な他人任せの仕事は嫌っていた。しかしジョットバーレは田畑の耕作をひどくいい加減に行なったので、マシンは彼の仕事を監督し、時には自分でやり直すこともあった。またこの男は牛を手荒に扱うので、動物を大切に使うマシンはよく腹を立てていた。

マシンは死の前日にも竹カゴを編んでいたが、このカゴは完成しなかった。マシンは大変強い意志を持っており、先にも述べたが、「もし身体の右側が麻痺したとしても、残された左側の身体だけでも、生きていくために働き続けるだろう。」とよく語っていた。怠け者を嫌い、次男の嫁や末子とは衝突する時もあった。マシンの遺した作りかけの竹カゴは、父祖によって築かれた礎石の上に次代の人間は家を完成させなければならないこと、またそうすることこそ自立と繁栄への道であることを、我々に今も語りかけている。

2. 金細工

マシンが修業を終えて家に帰ってきた頃、彼と家族が生きていく上で最も重要な仕事は農業だった。しかし金細工の仕事が無かったとしたら、その後の繁栄は不可能だっただろう。マシンは金細工の仕事を非常に重視し、これは新しいものの考え方を、彼ばかりか彼の息子たちにまで与える源となった。彼は努力を重ねてきた結果、その日暮しの貧しい生活から家族を救い出しただけでなく、地位と名声をも手に入れたのだった。金細工職人としての基本的な技術はバルバの師匠から授けられたが、成功を手にするために自らの努力で、はるかに高度な様々の技術まで身につけていった。まず真鍮の装飾品を作ることから始め、それから銀の細工ができるようになり、とうとう金を扱えるようになった。

真鍮製や銀製の装飾品製作は、職人としてのマシンの名を広めるのに大いに役立った。また装飾品だけでなく、家庭内にある様々な日用品の修理もした。そのためマシンが金細工の仕事を専門に行なうようになって、古くからの顧客の中には、家庭用品の修理を依頼する者もいた。マシンは金細工の仕事がどんなに忙しくても、このような依頼を断ることはなかった。彼の仕事の方針は、誠実な技術で人々に奉仕することであり、それが一層顧客を魅きつけた。こうした金細工以外の、真鍮や銀を扱う臨時の仕事すべてが、彼の誠実さへの評判を高めていった。顧客の靴でさえ修理を厭わなかった。後に息子たちは、マシンがこのような類の仕事をやるのをやめるように推めたが、耳を貸さなかった。やがて顧客たちから徐々に金の装飾品の注文が来るようになった。優れた製品を作るために、他の金細工職人の仕事を観察したり、自

ら工夫したり、模範となる作品をよく調べたりした。始めの頃マシネが目指したのは、可能な限り正直に手間を惜しまず働き、顧客たちに満足してもらうことだった。

この時期(16歳過ぎ頃)には、弟の修業の面倒も見なくてはならなかった。マシネは大変厳格な人間だったので、どんなに小さな間違いも見逃さず、弟を罰したものだ。弟は他の様々な技術も学ぶことができ、こうして学んだあらゆる技術で、弟は兄のマシネより一歩上をいくまでになった。そのため弟は財を成すことでも兄の一歩上をいくに違いないと予想されていたが、その不道德な行いのために、実際には正反対となった。当時いろいろな人々のために作られていた装飾品は以下のようなものだった。(参考図参照)

銀製品

- | | |
|-------------------|---|
| 1. Rainya (腕輪) | 6. Kalli (腕輪) |
| 2. Bala (腕輪) | 7. Aunthi (腕輪) |
| 3. Thoka (腕輪) | 8. Thiunra (ネックレス) |
| 4. Jantar (ネックレス) | 9. Hari [Kampani, Mohar, Charami] (ネックレス) |
| 5. Habel (ネックレス) | |

金製品

- | | | |
|---------------------|--------------------|------------------|
| ① Phuli-Bulaki (指輪) | ⑤ Mundri (イヤリング) | ⑨ Aunthi (指輪) |
| ② Dhungri (イヤリング) | ⑥ Kilip (髪飾り) | ⑩ Tilari (ネックレス) |
| ③ Naugadi (ネックレス) | ⑦ Bala (腕輪) | ⑪ Sripul (髪飾り) |
| ④ Mundra (イヤリング) | ⑧ Madawari (イヤリング) | |

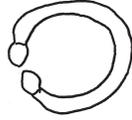
忙しい時はマシネは夜の11時まで仕事をし、ほんの4、5時間の睡眠をとっただけで目覚め、早朝から再び仕事に取りかかっていた。時には妻を手伝って牛や水牛の世話をしたり、乳を搾ったり、牛小屋の掃除をしたりした。ティーズやダサインやティハールのような祭りや、2月、4月、12月の結婚シーズン等の、1年で最も忙しい時期には、他の人々を雇って仕事の手伝いをさせた。しかしこのような時でも、彼の弟は自分のやりたいことにかまけて、兄の手伝いをほとんどしなかった。金細工の仕事や農業、木工、家の建設、屋根の葺き替え、竹細工等の他に、マシネは水場から水を運んだり、穀物を挽いたり、料理をしたり、掃除をしたりして、妻の手助けをしていた。

3. 家畜飼育

伝統的な農業方法では家畜飼育は重要な副業である。そのためマシネは牛や水牛、山羊を飼っていた。牛や水牛からは乳やヨーグルト、ギー(精製バター)を得ることができた。雄牛は犁耕に使い、山羊やニワトリは食用にしたり、売って現金収入を得たりしていた。また家畜から得られるもう一つの重要な産物として、農業用の厩肥が挙げられる。マシネは家畜をかわいがり、空腹や渴きを察知することができたので、動物たちはマシネの周囲に寄り集まり、よく



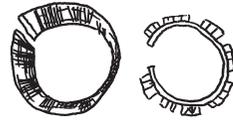
1. Rainya



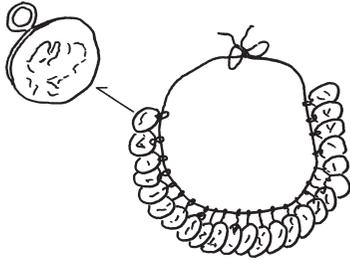
2(㉞). Bala



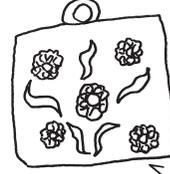
2(㉞). Bala (子供用)



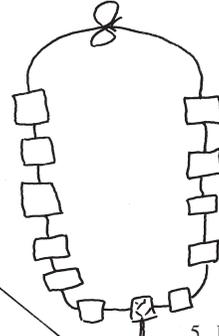
3. Thoka (断面)



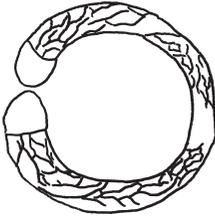
9. Hari (銀貨)



4. Jantar



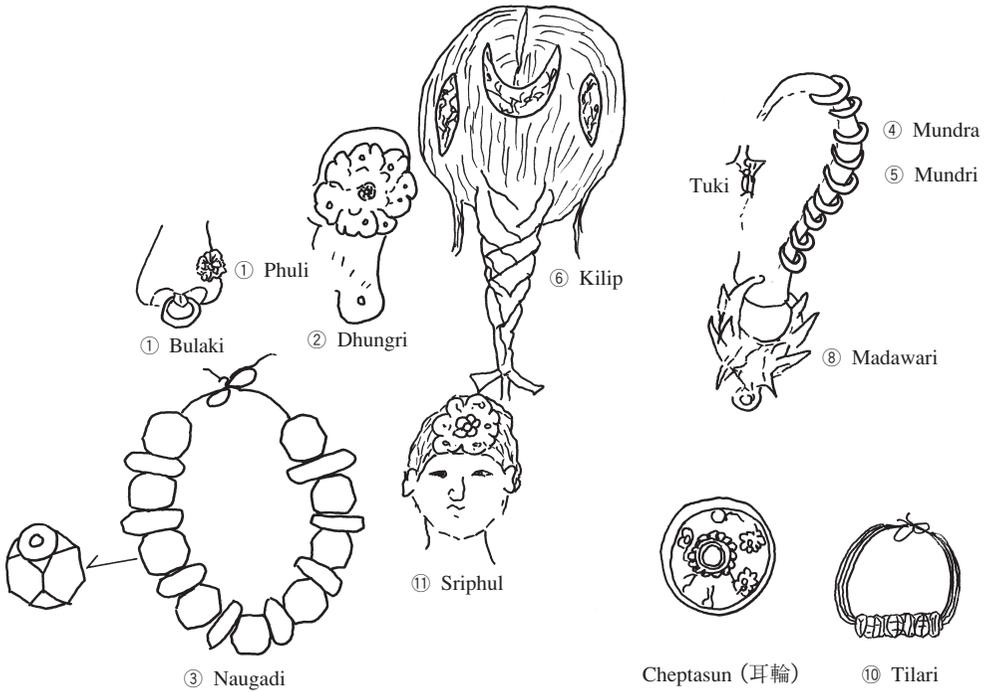
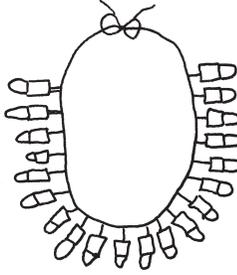
5. Habel



6. Kalli



8. Thiunra



彼の身体を舐めていたものだった。

4. 果樹栽培と植林

マシネの村アムラバスの気候や土壌は、果樹栽培に適してはいなかったが、彼はその育成に大きな興味を持っていた。果樹専用の畑はなかったが、適当な空き地にバナナ、オレンジ、アミロ(酸味の強い果実)、桃、梨、レモン等の木を植えた。しかし出来はあまり良くなかった。また好んで飼葉を刈る木や竹や、材木用の樹木を植え、特に飼葉木は、自分以外の家族が剪定すると上手く伸びないからと言って、いつも自分の手で剪定していたものだった。そのため彼の飼葉木は家畜に豊富な飼葉を提供した上に、将来の木材としてもすばらしく成長した。彼は、我々が森を守り育てるならば、森も我々を守ってくれるだろうと考えていたのだった。

晩年

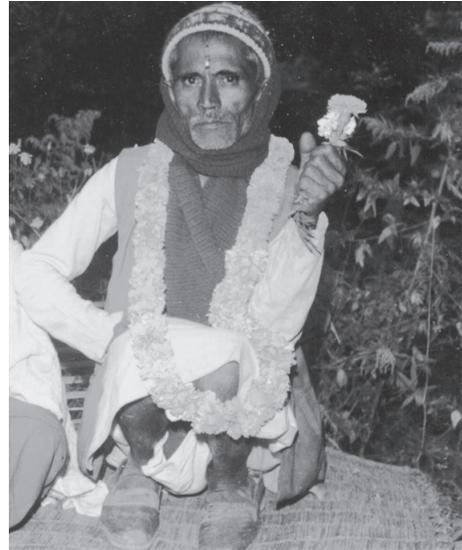
人生に死はつきものである。マシネは早死にするような人間ではなかった。重い病気とはずっと無縁だったからだ。60歳になるまで薬を服用したことも、注射をされたこともなかった。61歳になっても咳ひとつせず、強い薬も飲まず、重病にも罹っていないことを自慢にしていた。「常に身体を動かさなければ、血行も消化も排泄も滞ってしまう」と言っていたものだった。身体を動かし、新鮮で栄養のある食事を摂れば、全てのバランスがとれると信じていたので、一生懸命働き、自分の経済状態が許す限りの栄養豊かな食事をとっていた。マシネは読み書きができなかったが、長い間の経験や試行錯誤から、どんなに複雑で困難な問題でも、それを単純かつ正確な方法で解明することができた。彼の食事は栄養学的には完璧とはいえなかった。また休むことは錆びることだと考えていたので、ほとんど休養を取らなかった。

晩年のマシネは15人から成る大家族の長として暮らしており、そのためバランスの取れた食事をなかなか摂れず、やるべき仕事は膨大だった。彼には煙草を吸う習慣があって、毎朝の軽食のかわりに一服し、一緒にジャードゥ(濁酒の一種)を飲むことも時々あったが、酔っぱらうことはなかった。身の周りは常に整理整頓して清潔にしていたが、自ら望んで風呂に入るとはけっしてなかった。入浴は、宗教上の努めを果たす時を除いては、月に1度だけだったが、それで十分清潔を保てると考えていた。こうしておそらく過度の労働、偏った食生活、休息の不足、衛生面での至らなさ等が原因で、マシネは遂にひどい関節炎にかかってしまった。病魔はしばしば右手や右足の関節を襲い、そのためマシネは絶え間ない痛みを苦しんだ。

パルパのタンセンにあるユナイテッド・ミッション病院で治療を受けても治らず、マシネはカトマンドゥに移り、1987年12月15日から1988年1月10日まで入院していた。多くの検査が行なわれたが、病気の根本原因は不明だった。おそらく朝食のかわりにジャードゥを飲み続けてきたこと、喫煙、労働過多、休息不足、栄養失調等によって、血行に異常が起り、発病したと考えられる。この種の関節炎は現代医療技術にとって珍しいもので、そのため効果的な治療法がまだ確立されていないようだ。マシネは退院する際、3種類の錠剤を与えられて帰

宅した。だがこれらの錠剤の副作用で、彼の体はむくんでしまった。病院でもマシネは三男に、白米とダール・スープ(特にガハットという豆のダール)、火であぶったトウガラシなどを食べさせてくれるよう頼んでいた。香辛料や酸味の強い食物は禁じられていたが、妻がやめるよう懇願しても、食事と一緒にトウガラシをかじっていた。煙草と酒はやめていた。マシネのように消化の良い食事と多忙な仕事に慣れている人間にとって、病院のベッドで休養するのは退屈でうんざりすることだった。そのためよく病棟を抜け出し、投薬の時間にベッドにいないので看護婦たちもうんざりした。そして回復(といっても不十分ではあったが)するとマシネは帰宅を望んだ。カトマンドゥでの仕事もせず過ごす毎日は、今まで経験したことがない生活で、退屈で苦しかったし、無為に過ごすことができない性格だったからだ。だが退院して帰宅した後、マシネの健康状態は次第に悪化していった。それでも身体が完全に治っていないのに、いつものように農作業をやりたがり、それができないと分かると座ってできる仕事をした。この頃マシネは竹のカゴを編んだり、ナムロや簡単な木工細工等の仕事をしていた。これらの仕事の他にドコという竹製の背負いカゴを編んでいて、死の前日にはもう完成間近だった。

翌日の昼、マシネは横になり、長男の嫁(トゥリケティ)を呼び、「セル・ロティを一つもってきておくれ。食べたいからね。」と言った。彼女は「はい、持ってきます。」と答えたが、次男は「いや、セル・ロティは食べさせられない。身体に悪いから。」と言った。しかし長男は「セル・ロティを食べさせてあげなさい。きっとこれがお父さんの最後の望みになるだろうから。」と言った。このやりとりを聞いていたマシネは「わかった。もうセル(狐という意味がある)もマウカネ(野生動物で、成長の段階で母親を食べってしまう)もいらぬ。」と言った。その後はもうマシネはセルを食べたいとは言わなくなった。そして彼は死んだ。苦勞していた少年の日に、それ欲しさにラフレの後をついていったこともあった美味しい食物。そのセルを食べるといふ願いを叶えることなく、マシネは死んだ。最後の言葉は「おい、お前たちは何を見ているんだ。私はもうすぐ死ぬ。私を家から外へ出してくれ。」だった。こうして彼は 1988 年 3 月 9 日(彼が生まれたのと同じ月)に 61 歳で、自分の家を去ると家族に告げ、二度と再び戻ることはなかった。



インドラ・バハドゥール・スナル(マシネ)

監訳者あとがき

南 真木 人

「私の父——金細工師マシネの一生」は、職人文化と近代化研究会のネパール側共同研究者であるロク・バハドゥール・バラールさんが英語で書いた、彼の父親のライフ・ヒストリーの全訳である。研究会の報告書にどのような形で貢献できるかを悩んでいたロクさんに、彼が属する金細工カーストの金細工師の一生を書いてみてほしいとお願いしたのは2年くらい前のことであった。ロクさんは、慣れない作業に戸惑いながらも、何度か帰省して母親や兄から話を聞き、暇を見つけては少しずつ書きためてくれた。そのため、一部重複するところもあるが、全体として、彼の父マシネの一生とその生きる姿勢が金細工に限らずさまざまな経験によって培われてきたこと、そうした生き方がロクさん自身に強い影響を与えていることがよく伝わってくる内容となっている。

ロクさんは1962年生まれで、現在カトマンズにあるトリイブバン大学アムリット・キャンパスにおいて物理学の講師をしている。私がロクさんと知り合ったときには、既に彼の父は亡くなっていたので、私は彼の父に会っていない。しかし、これまでに二度、彼の故郷アムラバス村を訪ねたことがあり、折にふれて彼の父の話を知ることができた。また、ロクさんからは、鍛冶カーストの文化や解放運動などに関してさまざまなことを教わってきた。研究会でも、アムラバス村のロクさんの親族を通じて集約的な共同調査をさせていただいたことは、本報告書の内容が示すとおりである。

修士号をもち、大学の講師であるロクさんは、地域随一のエリートである。彼は1982年、大学院を休学して地元の高校で教鞭をとりながらアムラバス村の開発や近代化を推し進めた。当時、教え子と共に作ったという道や給水タンク、水汲み場は今なお使われている。また、それまで当然のこととされてきた、不可触カーストの人が茶店で使った食器を自ら洗うという習慣を、運動を起こして撤廃させた。村の高台にあるライナ・デヴィ（ドゥルガー）神の祠へ、不可触カーストの人も入れるようにする運動も続けている。その祠を案内してくれたロクさんは、「子供の頃は下のカースト（タラ・ジャート）だからと、ここから先は入れてもらえなかった。今でもこの上へ行くときには胸が少しドキドキする」と言い、「一度、本当に悪いことが起こるだろうかと、こっそり祠に小便をかけてみたことがある」とも話してくれた。

このライフ・ヒストリーの中では、このような被差別の問題にはほとんどふれられていない。だが、マシネが信用というものを第一に重んじ、誠実な仕事に努めてきたことは、けっしてこうした問題と無関係ではなかっただろうと推測される。マシネの信望の厚さは、その子供たちにも受け継がれており、現在ロクさんの長兄はチャハラ行政村5区（ワード）の区長（アダッチェ）という要職についている。アムラバスを含む9つの集落

(トール)からなり、マガール人とバフン・カースト世帯が優勢なこの区において、金細工カーストから区長が選ばれていることは他ではまず例がない。聞くところによると、マシネの代から懇意にしてきたチェトリの友人による後ろ押しがあったとのことだが、本人の温厚な人柄と献身的な奉仕によるものだという事は、短期の滞在においても村人の訪問が絶え間ないことから伺い知ることができた。

ライフ・ヒストリーからは、1920年代から今日に至るネパールの時代背景や、金細工師の修業過程、金細工カーストの婚姻習慣などさまざまなことを読みとることができる。なかでも、1920年代においても、金細工師は農閑期の5カ月ほどタライや隣接する郡へ出稼ぎに行っていたことは興味深い。こうした生活スタイルは今日もほとんど変わることがなく、ロクさんの兄弟や親族はタンセン、プトワール、ナワルパラシ郡のトリベニやアルンコーラ、中西部のスルケットなどに出かけているからである。また、マシネが修業時代に仕事を掃除しては金の屑を集めていたことからわかるように、金細工師は鉄を扱う鍛冶師よりも蓄財の機会が多く、相対的に裕福であることもくみ取ることができる。しかし、それは逆に身を持ち崩してしまうこととも表裏一体であることは本文中から明らかになる。私には、帰省するラフレと呼ばれるグルカ兵達の気前のよさも、時代を感じさせて印象的である。

父親への敬慕の情に導かれて、丹念に書きこまれたこのライフ・ヒストリーを読むと、常々思ってきたことだが、ネパールの人の物語を紡ぐ能力の高さに感嘆する。キリヤ(服喪)において砂糖と称して塩を渡す機転、セル・ロティにまつわる思い出といった逸話や、「休むことは錆びることだ」といったマシネの言葉の数々に、ロクさんとほぼ同じ歳の私が日本で日常的に見聞きしてきた生活体験とのギャップを感じずにはいられないのである。

翻訳はICUアジア文化研究所が担当し、一部ネパールの事情にあわせて南が加筆、修正した。また、適宜改行を増やし、「弟スリーマンのこと」という小見出しをつけ加えた。原文にはタイトルがなかったので、私のほうで宮本常一氏の「私の祖父」(1995『忘れられた日本人』岩波書店)にあやかって、「私の父」とつけた。この一文が、そうするにふさわしい豊かな内容に満ちていると思うからである。